

《海外研究室事情(1)》

Space Telescope Science Institute

アメリカ合衆国, メリーランド州ボルチモア

<http://www.stsci.edu/>

Space Telescope Science Institute (STScI) は、言わずと知れたハッブル宇宙望遠鏡 (HST) の御ひざ元である。また、8 m クラスの次世代宇宙望遠鏡 (NGST) の本拠地になることも決まっており、アメリカの天文学研究のメッカの一つといえる。建物内を歩き回ると、論文などでしばしば目にする研究者たちの部屋と有名な観測結果のパネルをたくさん見つけることができる。とはいっても、一般の訪問者には、正面入口に入ったときに頭上を飛んでいる HST の縮小模型や、HST が撮影した深宇宙パネル、時折モニターに映し出されているスペースシャトルからの映像くらいでしか HST との関連を感じられないかもしれない。

STScI は、NASA と AURA (天文学研究のための大学連合) によって運営されており、その4階建てのビルは、医学研究で有名な Johns Hopkins 大学 (JHU) の Homewood キャンパスの外れの崖っぷちに建っている。そこには、約 400 人程度のスタッフと 100 人程度 PhD をもった研究者がいるが、ご多分にもれず、建物が手狭になり、道路を挟んだ隣の JHU の物理天文学科の建物にもポストドクが 20 人くらい間借りしている。JHU のスタッフ、学生、ポストドクは、自由に STScI との間を歩き来している。

私は、1997 年 9 月から 1999 年 12 月末まで、STScI に客員研究員のような立場で滞在し、銀河や星間ガスの数値シミュレーションによる理論的な研究を行った。直接 HST と関係していたわけではないが、多くの一線の観測家と議論、共同研究が行えたことは大きな収穫だった。STScI で私が所属していたのは、Research Programming Office というビジターを含めた研究者のグループだった。ここ

にはさまざまな研究分野 (多くは観測家) の研究者が数 10 人所属していたが、ポストドクが多く比較的年齢層は若かった。国籍はさまざまであるが、日本人は東大の松原氏が JHU に途中から来られた他は、研究所周辺にはいなかった。

研究所の朝は早い。8 時には多くの人は出勤し、9 時には駐車場にスペースを探すのが難しくなる。帰るのもまた早い。6 時過ぎには駐車場はがらがらである。週末に仕事をしている人もまた少ない。

研究所では実に多くのコロキウム、セミナー、ジャーナルクラブなどのフォーマル、インフォーマルのミーティングがある。NGST でどんなサイエンスを行うべきか、というミーティングも活発に行われていた。その中でまずビジターにとって最も重要なのは、毎朝 10 時半から図書室で開かれる "Science Coffee" だろう。その時間になると三々五々研究者がコーヒーカップ片手に集まり、落としたてのコーヒー (カフェインありとなしが用意されているが、decaf は人気がない) を飲みながら、30 分ほどダベるのである (写真)。実は話している内容は、サイエンスとはあまり関係がないことが多いのだが、それでも、いろいろな人と知りあえる良い機会なのでビジターが参加しない手はない。感心したのは時間が来ると、雑談を切り上げ、さっとみんな仕事に戻ることである。これはどのミーティングにも共通していて、だらだらと何時間も会議を続けることはない。

所内のカフェテリアに隣接したミーティングルームでは、割にインフォーマルな、ランチタイムのセミナーが、銀河、AGN、星形成などテーマ毎にほとんど毎日のようにあった。みんな適当にラン



“Science Coffee”の常連たちと。前列右から2番目が筆者。

チを取りながら、ビジターなどの話を聞くのである。他にも、夕方からピザをつまみながらの“Cosmology Pizza”なんていうのもあった。もっとフォーマルなのは、金曜日のコロキウムだが、これも始まる15分くらい前には、紅茶とクッキーが用意され、講演前に、ひとしきりダベるのである。研究者どうしのinteractionをできるだけ増やそうという工夫なのだろう。所内の研究者全員が、それぞれどういう研究を行っているかについて「2分間」話をするという機会が年2回あるのも面白かった。

コロキウムには、超大物からポスドクまで、さまざまな分野の人が来る。聴衆の数も多いし、質疑応答も活発である。JHUでも、毎週コロキウムがあるし、毎年春には、STScI主催のワークショップがある。全部に出ていると研究している暇がないというジレンマに陥るが、とにかく人の出入りの活発な研究所である。

研究サポート体制の充実、日本の大学、研究所からみればうらやましいだろう。部屋のワークステーションの管理は、専門の部署があたり、研究者は普通何もしない。部屋のゴミですら毎日集めにくる。出張に行くときには、研究所の旅行部門でチケットを取ってくれる。大量のコピーは、コピー専門の部署に頼むことができる。オフィスは必ずしも広いとは言えないが、どんなところでもとりあえず各個人毎に電話があるのはアメリカらし

いかかもしれない。

また、研究所は、一般大衆への広報に非常に気を配っているのが印象的だった。Public Outreachという広報専門のセクション（国立天文台の広報普及室に相当するもの）があり、毎月1回、一般向けの講演会を所内で催すほか、テレビ番組づくりやHSTによる天体画像の美しいポスターなどを作成している（ポスターやカードは、自由にもらえるので御土産にもよい笑）。このセクションの職員は天文学者だけでなく、テレビ番組作成経験者など、マスメディアのプロを雇っている点は、日本とは大きく違うところだろう。

研究生活は充実していたが、よい点ばかりでもない。ボルチモアは全米でワースト10に入るほどの治安の悪い都市と言われており、日本ではあまり必要のない緊張感が日常生活を送るうえで不可欠だった。研究所や大学の周りは比較的安全と言われていた地区だったが、それでも研究所の職員が出勤途中にホールドアップにあたり、私のオフィスの目と鼻の先のエレベータ内で強盗があったり（その時間、私はオフィスで仕事をしていました!）、ダウンタウンの自宅の上空をしばしば警察のヘリがサーチライトを照らしながら、飛び回っていたり……。研究所の駐車場に行くのでも、夜間は警備員に頼めばエスコートしてくれるという「サービス」もあった。幸い、私や妻は一度も危ない目に会わなかったのだが、単に運がよかっただけかもしれない。

帰国してから、あっというまに1年がたってしまった。研究所に隣接するワインマンパークのリス達や、夏に乱舞する妙に明るい蛍が懐かしく思い出される今日この頃である。

最後になりましたが、研究所で御世話になったNorman教授や、滞在費を援助していただいた山田科学振興財団、長期に渡る不在を快く了解していただいた理論天文学研究系の同僚のみなさんに感謝いたします。

和田桂一（現：国立天文台）